



臨床哲学
学生研究室

臨床哲学のメチエ vol.14

臨床の知のネットワークのために

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために

vol.14 supring/summer 2005

特集 臨床哲学の現在—哲学カフェ／高校での哲学教育

もくじ

●哲学カフェ三者三論 . . . 4

「これが私の優しさです」

—須磨友が丘高校の生徒たちとの対話と彼女／彼らの優しさ

武田朋士（臨床哲学博士後期課程）

日常を紡ぐことの哲学的感受性

—看護教育における哲学カフェの試みから—

渡邊美千代（愛知医科大学非常勤講師）

「哲学カフェ」によせて

藤本啓子（甲子園大学非常勤講師）

●「出会いのてつがく 2003」@福井高校 . . . 11

授業担当者

三浦隆宏、西川勝、稲葉一人、会沢久仁子、紀平知樹、檜本直樹、相川千晴

桑原英之、山本麻紀子、高嶋麻衣子、岸田智

●洛星高校での授業について . . . 25

授業担当者

紀平知樹、寺田俊郎、山本麻紀子、高嶋麻衣子、稲葉一人、森芳周、屋良朝彦

西村高宏、中岡成文、玉地雅浩

臨床哲学の現在—哲学カフェ／高校での哲学教育

本メチエでは、〈臨床哲学の現在〉を伝える取り組みとして、「哲学カフェ」と「高校での哲学教育」を再度取り上げる。

前者については、それぞれの現場で継続的に哲学カフェを試行しつづけておられる3人の方々に文章を寄せていただいた。はじめに武田朋士さんからは兵庫県立須磨友が丘高校で、渡邊美千代さんからは愛知医科大学看護学部の教養ゼミナールにおいて、それぞれ行なわれた哲学カフェの様相について報告をしていただき、つづいて藤本啓子さんからは、ご自身の「哲学カフェ」との出会いから、哲学カフェにおける「進行役」の役割についてエッセイ風に論じていただいている。

後者にかんしては、2003年度に大阪府立福井高校で行なわれた「出会いのてつがく」、ならびに2004年度に京都の私立洛星高校で行なわれた「生命と哲学」の授業の内容を、臨床哲学の重要なツールである「メーリングリスト」において各担当者によって随時なされた報告をもとにしてお伝えする。

本紙で綴られている事柄は、おのおの現段階においてはむろん「結果報告／予備考察」の域を脱してはいないだろう。いずれここで述べられた言葉をもとにして、それぞれの報告者が『臨床哲学』などにおいて独自の考察を展開されることを編者としては望んでいる。



臨床哲学学生研究室の様子

哲学カフェ三者三論

「これが私の優しさです」

一須磨友が丘高校の生徒たちとの対話と彼女／彼らの優しさ

武田朋士

友が丘高校で講師をされている藤本さんからお話をいただいて、10月22日（金）、26日（火）の両日、友が丘高校で、哲学的対話を高校生と行う機会を得た。臨床哲学研究室から三浦、桑原、武田が参加し、三浦グループと武田グループの二つに分かれた。

武田が進行、桑原が記録を担当したグループでは、「これが私の優しさです」*という詩を読んで、それについての疑問・感想を述べてもらうところから出発した。漠然としたテーマとして「友達・仲良し」を考えていたが、それは、同じクラスの人もいる中で話づらいテーマではないかと思い、テーマとしてやや離れるが、一つの詩を共通の経験とする形をとった。

出席者は、一日目が17人で、二日目が13人。最後に書いてもらった感想から、進行役の緊張、それによる「テンションの低さ」(!)が、生徒に大きく影響していたことがわかったが、それでも、二回目になるとそれなりに活発な対話が行え、生徒たちの中にかすかながら気づきもあったようだった。

初日は、流れの悪い時間だった。先に書いたように、進行役の緊張は生徒たちにとってテンションの低さとして映り、やりにくい雰囲気をつくっていたようだった。最初にある生徒に詩を朗読してもらい、それから、詩の中にでてくる「私」と「あなた」の関係、なぜこれが「優しさ」なのかなど、疑問とそれに対する自分の考えを述べてもらうところから入った。「私」と「あなた」の関係がどのようなものであるかを確定させる必要はないし、もちろんそのようなことは無理なのだが、それぞれの捉え方があるということを確認しているだけで、他人の考えに反応するという場面をつくることができなかった。私と生徒との1対1の関係を無数につくっているだけの状態をどうやってほぐしていけばいいのか戸惑った。そのうち、詩で話すことも難しくなり、自分の経験の中から「優しさ」について話

してもらうことにした。そのなかで、「優しくする」ということの語りにくさの話がでたので、今回はそれについて考えてきてもらうというところで初日を終えた。

これも後で感想からわかったことだが、私にとって1対1の閉ざされた対話になっていると感じたものも、当然、皆の前でなされているのだから、完全に閉ざされているわけではなく、周りで聴くだけでもある意味で対話に参加していることになるようだった。自分が参加者であれば当然気づいていたようなことかもしれないが、進行役に立つことで見えなくなっていたように思う。問題は、発言の仕方への生徒の戸惑いにあった。

初日は机をコの字型につくり、席順をこちらで指定していた（仲の良いもの同士での私語を防止するため）が、二日目はそれをやめ、椅子だけで小さい円をつくってもらい、席を自由にした。それぞれの体験の中から「優しくする」ということについて考えてきたことを話してもらったのだが、総じて、やはり「優しくする」ということに潜む「嫌らしさ」（それは、「見返り」を求める行為である）について話す生徒が多かった。「優しくする」という表現に抵抗があるようだった。とはいえ、なかには、「優しさ」は「自然」なものでなければならないという意見に対して、「優しくしたいという気持ちが自然に出てきたらどうするのか」というシャープな問いもあり、「優しさ」という問いが生徒になじんできているようだった（生徒の感想から、初日は、「優しさ」を問うこと自体にも動揺があったようだった）。また、一度自身の経験に立ち返ったことで、詩に対する疑問も身に迫るものになったようで、最後に改めて「これが私の優しさです」と言い切っていることをどう考えればいいのかということが問われた。そうして、「見返り」を求めない「優しさ」が語られているということ、したがってすべて「優しくする」ということが「嫌らしい」わけではないことという主旨のことが話された。最終的に詩に戻ってくるとは思わなかったが、そのことによって、自身の経験のなかでの「優しさ」と他人が考える「優しさ」とを交差させるだけではなく、更に詩の中で語られている「優しさ」をいくらか交差させることができた。詩の捉え方が変わったというのは、予想していなかった結果だった。

基本的にはしっかりとした考えをもち、それを言葉にすることのできる生徒たちばかりだったので、問題は、発言の仕方をこちらでどのように整えるかが重要であったと思う。発言の仕方、それに対する戸惑いが生徒たちにあったことがわかったのが、二日目に席を自由にするので活発に意見が交わされたからである。席を自

由にすることで、生徒の側の緊張はほぐれ、何よりも、とりあえず話すきっかけを友達に話しかけるようにすることで作り出せていた。発言の仕方の戸惑い、それは、どこに／誰に向けて話せばいいのかわからないという戸惑いだった。ここには、進行役の緊張がテンションの低さとして映るということも関係している。とりあえずは進行役に向けて話しかければいいのだが、それがしにくかったのだ。隣に友達が座っていれば、同意を求めつつ、ほとんどその友達だけに話しかけるようにして、意見を述べる事が出来ていた。それは、私語との境界が危ういものではあるが、それを私語と見做してしまわず、発言として受け取ることも可能だと思う（もちろん、すべてがそうではないし、進行役の拾い方がポイントになる）。

今回の対話では、どこに／誰に向けて話すのかわからないという戸惑いに対する先導をかってでくれた生徒がいた。その生徒の感想には、「これが私の優しさです」と書かれていた。その生徒をはじめとする、参加してくれた生徒の「優しさ」に助けられた対話だった。対話に参加してくれた友が丘高校の生徒に、そしてその場を提供してくれた藤本さんに、改めて感謝したい。

* 「これが私の優しさです 窓の外の若葉について考えていいですか／そのむこうの青空について考えても？／永遠と虚無について考えていいですか／あなたが死にかけているときに あなたが死にかけているときに／あなたについて考えなくてもいいですか／あなたから遠く遠くはなれて／生きている恋人のことを考えても？ それがあなただを考へることにつながる／とそう考えてもいいですか／それほど強くなってもいいですか／あなたのおかげで」（谷川俊太郎『空の青さをみつめていると』、角川文庫、1968年）。

（たけだともひと）

日常を紡ぐことの哲学的感受性

—看護教育における哲学カフェの試みから—

渡邊美千代

1. はじめに

哲学的な感受性とは特別な感受性のことをいうのではないと考えている。感受性というからには、何か対象があって、そのものを知覚し、感じることはあるが、敏感になり過ぎて、本当のことが見えなくなったり、わからなくなったりすることもある。哲学的感受性は、ほどほどの感受性であって良いはずである。しかし、誰もがほどほどの感受性が身に付くものでもない。ほどほどの感受性に加え、ある特定の物事や現象にフィットする感受性、そしてそのことに疑問や問いをもつことが、哲学的な感受性を身につけられるプロセスの始まりとも言える。

今回、看護教育の教養科目である教養ゼミナールに哲学カフェを試みた。その報告と実践報告をもとに、看護教育における哲学的感受性について検討したい。

2. 教養ゼミナールにおける看護学生の哲学カフェの試み

今回の看護学生対象の哲学カフェは、教養科目である教養ゼミナールの一環として行った。「生活現象の中でのこころとケア」をテーマとして1年次の前期に看護学部生8名に対話中心型の授業を試みた。石田春男著「ふりの自己分析」（講談社現代新書）を購読し、その中の疑問点を身近な日常的な問題に置き換え、徹底的に議論するというスタイルである。90分授業、15回で、その中間である8回目の授業で中岡成文先生（進行役）に来学して頂き哲学カフェを行った。

教養ゼミナールの概要は以下に示す。

1) 教養ゼミナールの概要（対話中心型の授業の試み）

テーマ：生活現象の中でのこころとケア

対象：1学年の看護学部生

学習方法：

生活体験から起こる我々のこころの動きに着目し、石田春男著「ふりの自己分析」（講談社現代新書）の担当項目を発表し、各自が課題設定する。

発表内容に基づいて対話を積み重ねながら、生活の場におけるこころのゆくえとケアについて対話する。

その日の発表内容から疑問や問いを出し、さらに対話を重ねる。

～の対話を活かし、これまでの日常生活における疑問、問いをテーマに哲学カフェを試みる（90分）

2) ゼミの進行状況

各自の発表から次ぎのような疑問や問いが提示された。

- ・看護者は、ふりなしに患者に接することができるか
 - ・患者がふりをしないでケアを受けることができるか
 - ・学校の自分、家にいる自分、ふりのない自分はあるのか
 - ・日常的なふりは、性、国、民族によって異なるのか
 - ・本当の自分＝今の自分なのか
 - ・良い子のまま大人になった人は、そこから脱皮できるのか
 - ・良い子としての自分を放棄するってどういうことか
 - ・時代を伴ったふりはあるのか
 - ・自己の死は、しめくくりとしてのふりだろうか
- などのいくつかの問いが出され、対話を行った。

そのひとつである「自己の死」についての問いでは、「死は私の外にあるのか?」「私の内側にあるものか?」といったことが対話の中心となった。私の死は、自分しか体験できないことから外側にあるのではなく内側にあるはずである。また、生が死の意味を強調し、また死が生の意味を強調することを考えると死は、内側にも外側にもあり、また内と外の間にもあるのだとも考えられる。といった対話から「安楽死」を考えるにも自分がどうしたいかを決定するまでのプロセスを自分だけで考えるのではなく、自分の外に在る人と一緒に考えながら決めていきたいといった結論に達した。「生と死」は、私のものであって、他者のものでもあるということである。

3) 看護学生の哲学カフェ

その後、学生に哲学カフェのテーマを募り「人はなぜあいまいな表現をするのか」が選択された。

「人はなぜあいまいな表現をするのか」のテーマを提示した学生は、日ごろ、友人や学友との関係性の中で「あいまいな表現」をして、その場を逃れている自分自身もどかしく感じ、その中から出された問いであった。学生の間では、「微妙だね」「・・・ぼい」といった言葉を日常的に使う。しかし、あいまいな表現をとることで、中立的な立場を保つ為の「ふり」のひとつであることを導いていく。また、良い人間関係を保つための自己防衛でもあり、あいまいな表現を使い、自分の言葉に責任をもつことを避け、「たぶん・・・」「・・・のような気がする」といった言葉を日常的に使っていることに学生は

気づく。その人を傷つけない、その人から信頼を失いたくないといった思いがある。つまり人間関係を良好に保ちたい、うまくいかない関係を逃れるためにも「あいまいな表現」を使い、それが友人関係を保っているのではないかといった対話が続けられた。学生は、日常的に自分と学友、友人との関係に問いが向けられることに直面している。

3. 「あいまいな表現」を使うことのクライアント-ナースの関係性

今回学生は、人との関係性の中で「あいまいな表現」を使うことに問いを向け、日常的な体験から答えを導き出そうとした。日常的に何気なく使っている言葉が、差し当たり、現実とぴったり適合することなく自分を表現していることも多い。自らを表現するということは、「あいまいな表現」であってもひとつの意思を表出することであり、自分自身が選択して、相手との在り方を決めていることになる。

クライアント-ナースの関係においても「あいまいな表現」を使って会話することがある。あいまいな表現は、相手を傷つけないといった意思の現われでもある。しかし、あいまいな表現を使ったナースは、「もっと別の表現の仕方がなかっただろうか。」「かえって信頼を失ったのではないだろうか。」と考えることもあるのではないだろうか。

Kim (2003) は、『看護学における理論思考の本質』(The Nature of Theoretical Thinking in Nursing) クライアント-ナース現象にケア哲学的意味合いについて述べている。Kim は、意味合いで分類した場合のクライアント-ナース現象領域における現象例には、接触現象、コミュニケーション現象、相互作用 mutuality 現象がある。その中で最も重要なのは、ナースがクライアントと相互作用するときであると主張している。さらに、ナースとクライアントとのやりとりには、人間の尊厳や自律性の倫理的価値観があらゆる看護行為を通じて守られ、患者の権利が擁護されることであり、看護学においてケアの哲学の実行で最も重要なのは、ナースがクライアントと相互作用するときであると述べている。(139)

もし、「あいまいな表現」でクライアントに伝えようとするとき、例えばクライアントに心配させないように「あいまいな表現」で言ったり、クライアントにとってあまり良くない出来事を「あいまいな表現」で伝えたりすることにジレンマを感じるのは、クライアント-ナースとの間に人間の尊厳や自律性の倫理的価値観に大きな影響を及ぼしているからである。「あいまいな表現」を

クライアントは、ナースの気遣いとして受け入れることもある。その場合は、お互いの気遣いを分かち合うという共在の関係を相互が選択したといえるのかもしれない。クライアントーナースの共存 (presence) は、あいまい (ambiguity) で、漠然としたどっちつかずの言葉、その場を逃げたような表現を使ったとしてもクライアントーナースの距離間は遠ざかっていくものではないと思われる。

4. 日常を紡ぐことで哲学的感受性は育つか。

医療の現場は、日々生活する日常性の体験とは異なる。言い換えるならば、医療といった現場が、日常的でない非日常的な場であると言ってよい。人は日常的な体験から離れることに不安を感じる。というのは、我々はいつも日常性から出発し、日常性に帰ることで、自らの存在的な価値を見出しているからであろう。つまり日常性は、我々のすべてを基底している。日常の中で、感じる、そして思考を紡ぐことに哲学的感受性が育まれると考える。哲学的感受性は、日常性から出発することが望ましく、過敏でないほどほどの感受性に、時として鋭敏な角度から見る視点が求められる。それは、ナースの側から捉える日常ではなく、他者であるクライアントの日常を捉えることの感受性を養うことにも通じることもあるように思う。ほどほどの感受性に加え、ある特定の物事や現象にフィットする感受性とは、鋭敏な角度から見られる日常性への視線である。日常はいつも自分自身にまわりついてくるものである、また日常にどっぷり浸ってしまう我々の身体がある。そのことは身体が日常に沈殿していくと同時に、日常に浸らずして生活できない身体があるということである。その身体によって日常生活体験が積み重ねられ、価値づけされた行為への理解を日常に求めようとする。哲学カフェに提示される問いは、日常といった私的であり、また公的な場に自己価値の理解を求めていると言える。

5. おわりに

哲学カフェは、日常の問いから出発し、自らの体験を言葉にして表現し、対話を重ねながら共同思考している。それは、物質的な身体の実在性 (reality) な体験とは異なった連続的で留まることない生きている生命体として存在者のアクチュアリティ (actuality) な体験を浮き彫りにすることでもある。実在性 (reality) とアクチュアリティ (actuality) 双方の共同思考を繰り返すことで、より普遍的な答えを見出すことが可能となる。実在性 (reality) からは「ほどほどの感受性」が生まれ、「あ

る特定の物事や現象にフィットする感受性」は、アクチュアルな中から浮き彫りにされるのではないだろうか。

誰もが、日常の中で何らかの疑問や問いを向けながら生活している。しかし、日常生活する者へのケアを志す看護学生は、自らの日常体験を他者が体験するとしたらどんなリアリティ (reality) とアクチュアリティ (actuality) な体験になるのかを言語表現化していく機会が少ない。哲学カフェでは、その過程を経験する機会を得ることができる。また看護学生は、その人がその人らしく生きられるように日常への視線を向けると同時に医療の生々しい現場に目を向けることが要求される。視線を向けながら実践するにあたっては、知識の詰め込みだけでなく、日常の問いから出発し、日常の中で答えを見出し、病む人の人生を大事にする哲学的感受性を身につけてほしいと願う。

私自身、哲学的な感性を身に付けたいと思い、哲学的感受性に憧れをもつひとりである。ここまで述べてきた「日常を紡ぐことの哲学的感受性—看護教育における哲学カフェの試みから—」に偏りがあればご指摘頂きたく思う。

最後に今回、哲学カフェにご協力頂きました中岡先生に深く感謝致します。また、興味と関心を示し、参加してくれた学生、この機会に関わって下さったすべての方々にお礼を申し上げます。

引用・参考文献

1. Hesook Suzie Kim(2003),The Nature of Theoretical Thinking in Nursing Second Edition.Springer Publishing Company.(鶴重美監訳.(2003). 看護学における理論思考の本質,日本看護協会出版会, p 139.)

(わたなべみちよ)

「哲学カフェ」によせて

藤本啓子

哲学カフェとの出会い

「哲学カフェ」に関する全体討議から始まって、最近では「コミュニケーション・デザインセンター」設立に向けて「哲学カフェのお約束」や、「哲学カフェをめぐる議論」が活発になされるようになったので、そのような動きや方向性に関する事柄ではなく、ここでは、私の「哲学カフェ」との出会いから今日までについてのあれこれを振り返りたいと思う。

大阪大学臨床哲学研究会との出会いは、確か1999年ごろ、ちょうど私自身が大学の研究室を去り、臨床の知とはどのようなものか、という思考を繰り返していたころであった。ある方の紹介で、その当時の私の希望がかなうことをやっているところ、さらに通える範囲の場ということで、臨床哲学研究会を紹介され、「その活動の様子を同封します」と同封されていたのが『臨床哲学』の創刊号であった。「そこではナースとか、学校の先生など様々な分野の社会人が通っていて、なかなかおもしろいところですよ」とその方は言うておられた。それがきっかけとなって、今日に至っている。

しかし、最初はSD（ソクラティック・ダイアログ）や「哲学カフェ」と言われても、海外での取り組みは紹介されていたものの、一体どのようなことをやるのかよくわからなかったし、当時はメンバーの中でも半ば手探り状態で、共通認識もまだなかったように記憶する。そこで、とりあえず、わからないものは、一緒にやってみるしかない、と思ったこと、また、あまり形式にこだわらないで〈場数を踏む〉ことの必要性をどこかで感じるようになったことから、相乗りしてみよう、という思いが、現在の私の役割を決定したように思う。

いろいろな場に赴いて「哲学カフェ」や「哲学的対話」の紹介をする上で一番難しかったことは、頭に「哲学」あるいは「哲学的」という言葉がつくことの意味を説明することであった。単なるおしゃべりや会話、あるいはディベートでも議論でもない、では「哲学的対話」とはどのようなものなのか、あるテーマに沿って行われるワークショップや座談会とどう異なるのか、という質問が圧倒的に多かった。いずれにしても何人かの人間が時間を作って、ひとつの場に集まらなければならないので、漠然としたものでは人は集まってはこない。それでなくても「哲学」という言葉は、あいまいで一つまちがえば「き

な臭い」何かの宗教団体のようなニュアンスをもたれることもある。その点、「阪大の臨床哲学」という名前は、ある種の安心感を与えたことは否めない。

ただ、私がこのように臨床哲学研究室と相乗り状態で「哲学的対話」を広めたいと思ったのは、やはり、対話の必要性を感じていたからだと思う。また、このごろはなにかと感情に焦点をあてた取り組みの重要性が謳われているが、人間が知性と感性を合わせもった生き物であるとするならば、両者のバランスが大切で、「身体に正直であること」も大切であるが、「当たり前だと思われることを改めて問いなおしてみたり、自分を客観的に見つめる」知的ワークも重要ではないかと思う。

哲学的対話と対象的なワークショップとして、自分の感情の動きを理解し、表現することによって自分か絡んだ関係性を分析する、というものがある。感情に焦点を当てるということから、参加者はかなり感情を吐き出すことができるので、結果は良好（すっきりした）な場合が多い。しかし、それだけでいいのか、という思いを抱くのも事実である。確かに感情が大切にされる空間をつくる、ということは、解決できないことを解消する上では「すっきりする」とか「気が楽になる」という効果はある。しかし、そのあとで自分たちの課題は何なのかと問いをたて、反省する作業（思考過程）も必要なのではないか。

その点哲学的対話はケアの領域では難しいと思う。特にケアを必要としている人に対しては無理な面がある。しかし、ケアにかかわるスタッフにとっては、自分がなぜこの場に臨んでいるのかを絶えず自分に問うていく上では大きな意味をもつのではないかと思う。

これまでは哲学的対話を広めるという目的を主眼とし、ほぼ無償に近い形で実験的に活動してきたが、今後、臨床哲学研究室のメンバーが〈大学〉という枠組みから外れて（大阪大学臨床哲学研究室というブランドなしで）「ソクラテス的対話」や「哲学カフェ」の実践を通じ、どのように社会にコミットしていくのか、またどの程度対価を要求できる団体となるのか、今後も引きつづき相乗りさせていただけたらと思う。

「哲学カフェにおける進行役の役割」について

「哲学カフェ」を行う上での重要な役割として、ファシリテーター（進行役）というものがある。

「哲学カフェ」の進行役としてどのような〈対話〉を行うかということは、どのような〈場〉に臨むかということと大きく関係しているように思う。

〈対話〉と対話の行われる〈場〉との関係は、たとえ

ば何らかの共通の目的をもった等質のグループが〈哲学カフェ〉に集い対話をするという場合と、目的も動機も全く異なったフィールドに属する人からなる異質のグループが共通のテーマのもとに集い対話をする場合とではそれぞれ異なってくる。等質のグループの場合、目的が同じであるだけ、対話の方向性もある程度限定されてしまい、果たして〈開かれた場のシンボルの表象〉である「カフェ」の名にそぐうものかどうか、ということは再三言われてきたことである。

では、「哲学カフェ風対話」ではどうか。いずれにしてもそれはこちらが区別することで、その場に集う人たちにとっては、事前に哲学的対話に関して説明をするにしても、哲学的対話に不馴れなため、「抽象的で痒いところに手がとどかない」という感じを与える場合が多い。しかしその一方で、不馴れであるがゆえに「おもしろかった、興味深かった」という感想も出てきたように思う。したがって、ある程度回数を重ね、哲学的対話に慣れていくことが好ましい場合もある。

共通の目的を持ったメンバーとの対話では、その目的のために抱え込まざるを得ない様々な問題が露呈してくる。したがって、自分たちのかかえている問題解決という志向性が強く出るか、(ストレスなどからくる)感情の発露を求めてしまうという点で、自分たちの直接的な課題から少し距離を置いて、問題を一般化し、客観的に眺めていく、という作業がむずかしいように思う。対話を通して自分たちの気持ちが軽くなる、あるいは何か解決を見い出していける、という多大な期待をもってしまうこともある。

あるテーマについて他のメンバーの意見を聴くということは、それを聴いて自分でも考えたいという気持ちと、日ごろ他のメンバーが何をどう思っているのか本音のようなものを聞きたいという両面がある。しかし後者が先行してしまうと「哲学的」な対話ではなく、現実的な対話になってしまうこともあり得る。また、「信頼関係があったので何を話しても大丈夫だという安心感があった」という感想は、信頼関係がないと何も話せない、ということの裏返しでもある。例えば、そのグループの関係性(例えば上下関係、一般市民と専門家等)が影響して、本音では話せない、仮に話すことができたとしても、そのことによって、メンバー間の温度差のようなものが対話で露呈されてしまったりすると、その後の人間関係に悪影響を与えることもある。

したがって、抽象的なテーマで対話をすることの重要性もそのようなところにあり、その意味では、ファシリテーターの役割も大きい。等質なグループであるがゆえ

に行き詰まって、介入が必要となる、ということもある。

だが、個別の問いを一般化して、それをまた自己に戻すという作業がうまくいかないと、グループがかかえこんでいる課題のようなものだけが露出してしまい、うまくそれを自己の問題に還元できず終わってしまうこともある。そのような中、時間的な制限から、十分に対話できないまま時間切れで終わってしまうと、なんとなく〈微妙な問題〉をかかえこんだままで終わってしまったということもあるだろう。しかし、考えようによっては問題が明確になった、ということで成功だともいえる、つまり、自分たちにとって何が問題であったのかということ意識した、というメリットもある。

また異質なグループでの対話は、メンバーの多様性からテーマに対する思い入れも多様で、どれに論点を絞って対話を進めていくかという問題がある。また思い入れが強いただけメンバー間で感情的な対立を産む可能性もある。メンバーが感情的に反応した場合は、それをどうおさめるか、おさめる必要があるのか、どう抽象的な議論にもっていくか、など、現実的に難しい問題も生じてくる。各自がその問題を自分の問題として持ち帰る、ということも哲学的対話にとっては必要なことであるが、いたずらに不満だけをかかえて帰るということも十分あり得る。

そこでファシリテーターとして、どのような介入が必要か。ファシリテーターは、問題の論点を絞り、参加者がお互いの差異を了解しあう作業を手助けするものの、対話の内容には介入しない、ということが基本であると言われている。しかし、それは2時間～3時間という時間内では難しいケースもある。では、積極的に介入するかどうか。時間的な問題は多少解消されるかもしれないが、論点を絞りすぎて具体化してしまい、そこから問いを一般化するというところまでいかないと、差異のみが浮き彫りにされて、消化不良を起こしてしまう可能性も出てくる。またファシリテーターが中立性を欠くと、参加者の意見を独断でまとめたり、特定の参加者に対して疑問を投げかけたりすると、議論の流れを支配してしまい、違和感を感じてしまう他の参加者を置き去りにしてしまう、ということもある。

いずれにしてもある程度グループのダイナミズムに任せ、あまり介入を行わないのがファシリテートの原則ではあるが、どの程度介入を行っていくかという〈さじ加減〉が、ファシリテートの難しさであり、ファシリテーターの力量が試されるころだと思う。要は、グループの志向性に引きずられない(舵を取られない)ということである。基本はニュートラルであるということだが、

その〈場〉のダイナミズムを読み取る感性というものも大切なのではないか。要は、場数を踏んで洗練されていくことだと思う。

(ふじもとけいこ)



「出会いのてつがく 2003」 @福井高校

次頁からは、2003年4月から一年間にわたって行なわれた大阪府立福井高校での選択授業「出会いのてつがく」の記録を掲載する。

本来であれば、一年間（あるいは前年度も含めれば二年間）の取り組みで得た知見をもとにして、授業担当者各自による突っ込んだ分析がなされるはずであったのだが、時間・能力・熱意などの不足により、現在のところ実現する見通しが立っていない。当事者の一人として、残念な思いが残っている。

なお、ここでの報告の出所である「臨床哲学メーリングリスト」とは、金曜日6限目の授業「臨床哲学講義／演習」のプロトコルを始め、教員・学生・卒業生・一般の聴講者を含むメンバー各人の活動報告、ならびに情報提供などに使用されているツールであり、多角化する臨床哲学の現在において欠かすことのできない存在となっている。



結局お蔵入りすることになった、座談会「福井高校の活動は臨床哲学として何だったのか」（2004年6月4日）での一コマ

〈一学期〉

From: 三浦隆宏
Date: 2003.3.6 16:16:21 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml] 福井高校: 新年度 (一学期) の授業計画案

三浦です。

新年度の「出会いのてつがく」(一学期)の授業計画案を以下に記しますので、目を通して意見を(もちろん、批判大歓迎です)言っていただければうれしいです。

一学期のテーマ: 出会って、知ろう / 回数: 10 回 (昨年は 9 回)

目的: 社会のさまざまな場所(分野)で働いている人びとと「出会う」(=話を聴いて、質問する)ことで、自分の将来(仕事)について考える機会をもってもらふこと。

内容: 助ける仕事(医療・法律)、教える仕事(教育)、伝える仕事(報道・出版)に携わるひとに、自分の仕事(の裏話・苦勞・やりがいなど)について語ってもらい(50分)、生徒からの質問に答えてもらう(50分)。前後に、予習(「どういう仕事か?」「どうすればその仕事に就けるのか?」などの、最低限知っておきたい情報をあらかじめ三浦が示し、生徒にいくつかの質問を作成させる)と復習(先週を振り返り、「自分のイメージがどう変わったか」などの感想を文章に書かせる)の時間をもうけることで、生徒のインセンティブ(やる気)を高めるようにする。

生徒の〈問う力〉と〈書いてまとめる力〉を刺激したい。なお、今回は生徒が 24 人(二年生: 7 人、三年生: 17 人)と多いので、4 人を一グループにして 6 つの班をつくって、授業を進めていこうと思っています。

いちおう、昨年の反省を僕なりに踏まえたうえでの授業計画ですが、みなさんはどう思われますか? 忌憚のないご意見をお寄せください。よろしくお祈いします。

あと、じっさいに福井高校に来て、生徒と出会いたいという方を募集しています。(僕の方からお願いする可能性が高いけど。)

大阪府の規定により、3000 円しかお支払いできませんが、生徒はいたってスタンダードな高校生です。いまの、(良くも悪くも)平均的な若者と出会うことができるこ

とは保証します。

From: 三浦隆宏
Date: 2003.4.15 18:10:58 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml] 福井高校: 「ことしも大変!」

福井高校での授業「出会いのてつがく」(4/15)の簡単な報告をします。(いちおう研究室として引き受けているので。)

正直言って、「ことしもやっぱりか!」という落胆 & ショックが大きかったです。受講者 23 名(2 年生が男 5 人、女 1 人で 3 年生が男 3 人、女 14 人)中、5 人ほどを除けばあとはしゃべったり、寝たりしている子ばかりでした。しかも、しゃべっているのが女の子連中だから、もう手に負えません。(授業の前に相手をしてくださった先生が名簿を見て、「すごいのがそろっているなー」と絶句していました。)

来週以降のことを考えると気が重いです。

ただ、しゃべっている女の子のなかにも、「おもしろそうだから」「たのしそうだから」「きょうみがあったから」という積極的な選択動機を書いてくれた子もいるので(「ラクそうだから」「テストがないから」「他になかったから」というのも、もちろん多かったです)、なんとか期待に応えて、明るく楽しくやりたいんですけど、こればかりは僕のキャラクターも関係してくるので自信がないです。

怒るときは、バシッと怒鳴ったほうがいいんでしょうか? そして、寝ているけど授業の邪魔をしているわけでもない子は、放っておいたほうがいいんでしょうか?

何か助言があればお願いします。

あと、「芸人、美容師に出会いたい!」という子が多かった。誰か知り合いいませんか? また、明確に「卒業後はフリーターになる」と書いている子が 3 人。就職希望は 8 人。まさに、いまの平均的な若者の縮図なんですよ、奴らは。

愚痴ばかりになったので、最後に補足。でも、真剣に受講してくれている子も何人かはちゃんといるんです。去年と同じく。不思議ですよ。

From: 三浦隆宏
Date: 2003.4.23 17:28:49 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml] 福井高校:「今回はまずまず」

きのうの授業は、『おもしろい』授業って、どんな授業?』と題して、生徒にいろいろな意見を言うてもらおうことを試みました。授業内容そのものは、あんまりたいしてうまくいったとも思えませんが、前回よりも気さくに、多くの生徒と話をできたし、また生徒のほうも(時々はおしゃべりをしているものの)、こちらから発言を求めれば、頑張っているいろいろなことを話してくれましたので、僕的にはよかったです。

ただ、2回連続で「話をしたり、聴いたりする」授業になったので、今回は(哲学の要素ももちろん含むつも)ゲームでもしたいと思っています。個人的にひとつほど案があるので、こんどの「教育」の分科会で検討してもらいますが、誰かおもしろいゲーム(遊び)を知っている方があれば教えてください。よろしくお願いします。週一回の授業で、生徒が23人もいると、顔と名前がなかなか一致せず大変ですね。おしゃべりしている子に指名しようとしても、名前がわからずとまどうことがありました。

From: 三浦隆宏
Date: 2003.5.8 18:25:40 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0011] 福井高校(5/6):「ゲームの先へは行けず。」

今週は生徒たちにゲームをしてもらいました。(僕が勝手に作ったものなので、ゲームと呼べるほどの代物でもないんですが)
素材:『ロダンのココロ』という、犬が主人公の8コマまんがと、永井均さんの『子供のための哲学対話』という、少年と猫のダイアログ

やり方:

- 1.『ロダン』の8コマまんがをシャッフルしたものを、生徒(21人を6グループに分けた)に渡し、元通りに戻してもらう。
- 2.2つの8コマまんがのシャッフル(計16コマ)を渡し、元通りに戻してもらう。
- 3.『哲学対話』の「強さについて」のダイアログ(計8つ)

をシャッフルしたものを渡し、元に戻してもらう。

4.「友達が必要か?」のダイアログ(計10)をシャッフルしたものを渡し、元に戻してもらう。

(※徐々に難易度が上がっていくように設定した。)

なお、生徒のやる気を出させるために、「上位2チームには、こんどジュース(かアイス)をおごってやる」「下位2チームは来週、西川さんに何か質問しろ」といっておきました。

ゲーム自体は(おおむね)熱心に取り組んでくれたのですが、完成したのを見て「この話はどこがおもしろいのか?」「猫の言っていることに納得できるか?」といった、内容に踏み込むことがぜんぜんできませんでした。というのも、僕が「正解」と言うと、「やったー」と言って、せっかく完成したものをぐしゃぐしゃに戻しやがるんですよ、奴らは。おまけに次から次へと「先生、できた!」「先生、見て!」と声がかかるし。結局、僕がバタバタと教室を動きまわってただけでした。

生徒の感想:「楽しかった(けど難しかった)」というのが大半で、なかには「わからない所をみんなで話し合っただけで考えることはよかった。だけど難しかった。知らない人と話をするのはちょっと難しい。」という、僕のねらいを酌んでくれたものもありました。まあ、おおむね好評だったと言ってよいと思います。

来週は、西川さんに戦いに臨んでもらいます。



一学期の授業責任者

From: 三浦隆宏
Date: 2003.5.14 15:19:14 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0021] 福井高校 (5/13): 「看護師・西川さんの授業」

きのうは西川さんに「ひとを助ける仕事」をテーマにして、22人の生徒に話をしてもらいました。

「精神病院では暴れる患者さんを縛ったりするし、自分は患者さんを殴ったこともある」、また「いま勤めている老健では、新しく入っても、仕事やしんどくてすぐにやめていく人が多い」と、けっして看護とは生やさしい仕事ではないことを話し、「自分の仕事ははたして〈ひとを助ける仕事〉たりえているのだろうか？僕にはひとを助けることなんてできない……。でも、だからこそ、いまもこの仕事をやり続けているんだ」という、西川さんの胸の内をストレートに伝える内容でした。

ある生徒からは「精神病院でこなわれていることは、患者の人権を侵害しているのではないか？」という質問が西川さんにぶつけられましたし、また「(話の内容に)びっくりした。/ショックな気がした」「看護の仕事は思っていたより、大変だということがわかった」「西川さんの話をきけてよかった。めったにきけない、すごいきょうな話をきけたと思う」「自分も福祉エリアを選たくして、やっぱりムカつくこととかしんどいことばっか……。などなど、いつもの授業の感想よりもかなり書き込んだ感想を、生徒たちは寄せてくれました。

西川さんの授業は「見えていない(看護の)現実、もしくは見たくない現実」を生徒たちに突きつけた、たいへん良い「哲学」の授業だったと思います。

来週は中間考査のためお休みで、次の授業は5/27です。天気がよければ校外で、悪ければ校内で、「体を動かした」授業をしたいと考えています。

From: 三浦隆宏
Date: 2003.5.29 13:47:47 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0063] 福井高校 (5/27): 福井高校の「なんでだろう？」

先日は、福井高校の「なんでだろう？」と題して、生徒たちにとってもはや「日常の風景」と化してしまった福井高校にたいして、「なんでだろう？」と疑問符をつける作業をしてもらいました。(このアイデアは、テツ and トモの「なんでだろ～、なんでだろ～、ななな、なんでだろ～」という歌からのパクリ。)

ねらい:1) 身近なところに、たくさんの「なんで？」と思えることがあるのに気づいてもらい、2) 哲学とは、人びとがふだん「あたりまえ」に思っていること、ぜんぜん不思議と思っていないことに、あえて「なんで？ どうして？」と問うことから「はじまる」ことを知ってもらうこと。

生徒の「問い」の例:

「どうして前と後ろに黒板があるのに、すべての教室の黒板を使う方向、イスの向きが決まっているんだらう？」
「机とイスがくっついているのはなんでだらう？」(この問いは4人から出された)

「なんで福井高は選たく制になったんだらう？」

「なんで、ろう下の両側に教室があるのか？ どうして、校舎が1つにつながっているのか？」

なお、これらの「問い」は後日、福井高校の先生方に提出して、回答してもらおう予定です。

生徒の感想:

「何でだらうを考えるために学校を見つめなおせたとと思う」

「ふだんはべつに気にしていないようなことでもいざさがしてみると『これはふしぎだ。』と思うことがいっぱいかくされていた」

「自分のまわりの『なんでだらう？』を考えて、けっこう、たくさんあったからビックリ！した」など。

また、この日はM1の高嶋さんに同行してもらい、僕の授業のやり方などをチェックしてもらいました。

来週は、稲葉さんに「トラブルを解決するー話し合いをするー」と題して、生徒たちにMediationを体験させる授業をしてもらいます。

From: 三浦隆宏
Date: 2003.6.3 19:09:38 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0073] 福井高校 (6/3): 「法律家・稲葉さんの授業」

きょうは、稲葉さんに「トラブルを解決する」と題する授業をしていただきました。

稲葉さんのほうから後日、ご自身の感想や生徒の意見にかんする報告がなされるとは思いますが、簡単に授業内容の紹介と僕の感想を記しておきます。

授業内容:

1) 「教室で蛇を飼う / 飼わない」をめぐる生徒どうしがもめている場面のスクリプトを7人の生徒に読んでもらい、「もし、あなたが先生だったら、この場面をどう対処するか」をプリントに書いてもらう。

2) 「隣の犬の鳴き声」をめぐるトラブルを演じたビデオを見てもらい、「隣人どうし (= 伊藤さんと高野さん) の対話がうまくいかなかった理由」「君が、伊藤さんならどうするか」「二人の調停人のうち、一方がうまくいき、もう一方がうまくいかなかった理由」の3点をプリントに書いてもらう。

3) 「犬にぶつかって怪我をした」トラブルを3人の生徒に演じてもらい、「3人の対話について気づいた点」をプリントに書いてもらう。

4) 「5人の物語」と題する話を読んで、5人の登場人物を「自分が好感を持てる」順に並べる作業をしてもらう。

進行具合:

稲葉さんと三浦、青年司法書士会の方々(3人)、藤本さんが、それぞれ生徒たちに声をかけ、プリントに自分の意見を書く作業を見守っていましたが、完全に授業から「ドロップアウト」してしまう生徒は1人もいませんでした。(なお、きょうは6回めにして、初めて23人全員が出席)

また、2) のビデオは劇それ自体がおもしろいものですし、3) のロールプレイは演じてくれた3人の女子生徒の奔放なキャラがうまく発揮されていて、多くの生徒が楽しんでくれていました。

ただし、かなり「盛りだくさん」の内容であったため、生徒どうしの意見交換や授業の感想を書いてもらう時間をもてなかったのが残念でした。(生徒に「先週、自分たちは何をしたのか」をしっかりと把握してもらうために、来週の前半はきょうの授業の復習に充てるつもりです。)

感想:

多くの「大人たち」の目を意識して、多少はきちんと受講してくれるかなと淡い期待を抱いていたのですが、生徒たちはいつも通りでした。(つまり、いつもおしゃべりをしたり寝たりしている子は、きょうもそうだった。)他人の目を意識せず、ふだん通りの自分でいられるというのは彼/彼女らの「良いところ」なのかもしれませんが、「これまでの授業できっちりと注意してこなかった」自分の授業のまずさを、きょう参加された方々にさらけ出しているみたいで、すごく恥ずかしい気持ちになりました。(この言葉じたいが、「いかに僕が、生徒たちと違って、他人の目を意識しているか」を言い表していますが。)

ともかく、COE 授業のコーディネートなどで忙しいにもかかわらず、ご自身一人で授業の準備をすべて整え、粘り強く生徒たちと対話してくださった稲葉さんに、心から感謝いたします。ありがとうございました

From: 三浦隆宏
Date: 2003.6.11 09:30:20 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0105] 福井高校 (6/10): 「ついに我慢できず、授業を中止する」

当初の予定は、5限目で「5/27に生徒に出してもらった福井高校の『なんでだろう?』の問い」を素材にして、みんなでそれに答える作業をし、6限目では香山リカさんの『嫌われ恐怖症をなくそうよ』という新聞記事を読んで、生徒に意見を言うってもらうことでした。

結果を書きます。完全に失敗(というか撃沈)です。生徒のおしゃべりや、意見を求める僕に対して「わからん」「知らん」と素っ気なく答える生徒の態度に、業を煮やした僕が授業をストップさせました。「しばらく僕が黙っていれば、教室の雰囲気気づいて、しゃべっている子もおしゃべりをやめるのでは・・・」と思い、黙っていたら、20分も時間がたってしまいました。教室はかなり異様な雰囲気です。

臨床哲学のメチエ

5限の終わりに、いつも生徒に書いてもらっている「感想」のプリントを配り、「この5限目の時間のどこが悪かったのか(自分の態度、教室の雰囲気、教師である僕の態度など)自由に書いてください。」とホワイトボードに書き教室を後にしました。

2時半(6限目がはじまって10分後)にプリントを回収し、僕がさっきの時間に黙っていた理由(これまでのように、しゃべっている子にいちいち注意しながら、とりあえず授業を進行するよりも、あえて進行を停止させたほうが今後のことを考えると良いのではないかと思った)などを話し、また「どうすればこの授業が良くなると思うか?」と生徒に尋ねました。

さすがにおしゃべりをしている生徒はいませんでした。机に突っ伏しているのが半分、あと半分は考えてはいるんだけど意見を言うことはできず、黙っていました。

最後に「きょうは授業をやめてしまって、ごめんなさい」と言って、終わりました。

机を元通りに直すのを手伝ってくれた男子生徒に「やっぱ強敵だよな～、みんな」と言うと「アホな高校やから、しゃあない」との一言。生徒本人の口から、自分の通っている高校を真顔で「アホな高校」と評する言葉に、言いやうのない寂しさを感じました。

「我慢して授業をつづけるべきだったのだろうか。しかし・・・」僕には判断が付きません。生徒が書いてくれた「感想」を添付しておきますので、読んでいただければうれしいです。

なお、今回は6/24です。(来週の授業は7/15の1,2限へと変更)

From: 三浦隆宏

Date: 2003.6.25 15:27:14 Japan

To: 臨床哲学 ML

Subject: [clph-ml:0134] 福井高校(6/24):「答えのない問いを考える」

きのうは『ブラックジャックによろしく』の第42話のコピーを生徒に配布し、読んでもらいました。主人公の青年医師が「自分には医者になりたい理由がなにもない・・・」と苦悩する場面です。

設問として「(1)いちばん印象に残った箇所、もしくは

せりふはどこですか?、(2)その理由は?、(3)主人公にアドバイスを送ってあげるとしたら?、(4)将来、どういう職業に就こうと考えていますか?、(5)その理由は?」を与え、プリントに書いてもらいました。

ねらいとしては、設問にたいする回答を何人かの生徒に披露してもらうことで、「おなじ話を読んでも、印象に残るところは人によってさまざまである」ことを認識してもらうことで、伝えなかったことは、主人公は「どうして自分は医者になりたいんだ?」と問うているが、この問いに対する答えは存在しないこと、そして、学校では答えのある「問い」しか問われないが、学校を出たら「答えのない問い」を抱え込む機会が多くなることを知っておいてほしい、ということです。

将来就きたい職業にたいしては「なんとなく」接客業とか、「楽しそうだから」OLとか玉の輿、「スキだから」販売など、まだまだ意識が希薄のようにも思えます。空欄にしていた生徒がかなりいたし。

ただし、おもしろいことに、一番まじめにこの授業を受けてくれている2年生の女子と3年生の男子は、それぞれ「作品をとおして読者さ何かを感じてくれればいいなあと。口ではうまく言えないことも、文(というセリフ)にすれば伝わると思うから」漫画家、「小さいころからずっとなりたくて、友達と『いっしょにつくろうぜ』って約束したから」ゲームクリエイター、と将来なりたい職業を明確に書いてくれていたことです。

将来、〈創造〉をこととする仕事に就こうと考えている生徒が、この「哲学」の授業を熱心に受講してくれているというのうれしいことです。

今回は7/15の1,2限(いったい俺は何時に起床することになるんだ?)で、一学期のまとめの作業をしてもらいたいと考えています。



From: 三浦隆宏
Date: 2003.7.16 12:42:24 Japan
To: 臨床哲学 ML
Subject: [clph-ml:0170] 福井高校 (7/15): 「一学期のまとめ」

きのうは「一学期のまとめ」として、1限目で生徒に「一学期の感想」「二学期担当者への自己紹介や要望など」を書いてもらい、2限目ではそれをもとに生徒一人ひとりと僕とで簡単な面談(と言うほどおおげさなものでもないけど)をしました。

以下、いくつかの感想を列挙します。

1. 「もっと、いろいろな人と出会いたかった」→いろいろと事情もあり、一学期は看護師・西川さんと法律家・稲葉さんのお二人しか呼ぶことができませんでした。

(西川さん、稲葉さん、何人もの生徒が「二人と出会えてとてもよかった」と言っていましたよ。)生徒に「考えてもらう」授業よりも、「人と出会ってもらう」授業を目指していた僕としても、この点は残念でした。みなさん、「うるさいけど、かわいげのある23人の生徒たち」と出会ってみませんか? 「われこそは」という方は、ぜひ会沢さんまで。

2. 「授業の意図がよくわからなかった」「先生が何をしたいのかわからなかった」

→教師本人が「試行錯誤」のしっばなしだったら、そりゃあ生徒も困るでしょうね。

でも、ひとつぐらいはこういう「いったいあの授業は何だったんだろう?」と生徒に思わせるものがあったらいいような気がします。(調子のいい自己弁護・・・)

3. 「楽しかった」「おもしろかった」という言葉も何人か書いてくれていました。よかったです。

個人的な感想: やっぱり昨年と較べると格段としんどかったですね。正直、疲れました。二回ほど「もう、行きたくねー」と思いましたし。残念だったのは、生徒どうしの「出会い」の機会を粘り強く用意することができなかったことです。2年生と3年生の「学年の壁」をうち崩すことができなかったのが心残りです。

さいごに、メールや口頭で「感想、アドバイス、なぐさめ言葉」をかけてくださった方々に感謝いたします。ありがとうございました。

〈二学期〉

From: "AIZAWA Knk"
Date: 2003.9.11 12:44:33 Japan
To: <clph-ml@freeml.com>
Subject: [clph-ml:0216] 来年度の福井高校と、二学期について

臨床哲学研究室のみなさま

こんにちは。会沢です。

福井高校の「出会いのてつがく」二学期が、今週より始まりました。

二学期の授業についてもお知らせします(2)が、まず来年度の件をご相談します(1)。

(1) 来年度の福井高校の件

福井高校より、来年度の授業開講の可否を10月初めまでに決定し、返事をほしいとのことです。

授業枠は今年度と同じ、通年の選択授業、(火)5・6限です。

近いうちに一度集まって相談し、決めることになりますので、来年度の担当を希望するかどうか、それぞれ考えておいてください。

(2) 二学期の授業について

以下のように予定しています。

1. 担当者

会沢がコーディネートし、他に紀平さんや榎本さんなどが授業をする予定です。

2. ねらい

二学期のねらいは、シラバスと担当者の授業内容とにもとづき、次の二つです。

・身の回りのこと(例えば買い物や広告)について、話を聴いて、考えてみよう。

・お互いに話し、聴こう。(例えば自己紹介、インタビュー、他己紹介)

担当者は、その人のテーマで授業をします。

私、会沢は、意見交換できる場・関係を作ることを主眼に授業をしたいと思っています。

3. 日程

下記の日程です。見学歓迎します。

臨床哲学のメチエ

今週と来週は、さっそく紀平さんが買い物について授業をしています。今週は雑誌やビデオを見ましたが、来週については今内容を練り直しています。紀平さんの報告をお楽しみに。

10月半ば以降については、他の担当者と日程を相談中なので、確定し次第お知らせします。

- 1 9月 9日 紀平さん1：買い物のいみ
- 2 16日 紀平さん2
- 3 10月 7日 会沢1：名前を覚えよう
- 4 21日 会沢2：自分を紹介し、人を知ろう
- 5 28日 (三年生のみ)
- 6 11月 4日 (三年生のみ)
- 7 18日
- 8 22日 (土3・4限)
- 9 12月 2日
- 10 16日*日時変更かも

二学期の第一回目の授業では、おしゃべりを続け、ラクをしたいという生徒たちが多い様子。生徒たちを授業に乗せるのはやはりなかなか苦労しそうです。

From: 紀平知樹
Date: 2003.9.17 16:49:10 Japan
To: <clph-ml@freeml.com>
Subject: [clph-ml:0229] 福井高校 (9 / 7 . 1 6) に行つて来ました

紀平です。

先週、今週と二週間、福井高校へ授業をしに行つて来ました。

まず感想からいうと、確かにけっこう消耗するという感じですが、去年の話や三浦君のメールなどでいろいろと聞いていたからか、それほどひどいという感覚はありませんでした。とはいえ決してよいとはいえませんが……。それほど多くない僕の高校や高専で教えていた経験に照らし合わせてみても、普通ぐらいかな、という感じです。授業の内容としては、身近なところから考えるということが二学期の目標だったので、「買い物」からいろいろと考えてみよう、ということでやってきました。最初はグリーンコンシューマーのことでしようかと思ったのですが、こちらの準備や、高校の立地からそれはあきらめて、雑誌や広告などをみながら、「買物をする」ということのうちにどのようなことが含まれているかを考

えてもらおうと思いました。先週は、いろんな雑誌を見てもらったり、先ほども書いたように、映画(ファイトクラブ)をみて感想を書いてもらいました。

今週は、雑誌に載っている広告や、カタログなどを使用しました。具体的には、広告のロゴや商品、商品の説明などを消してコピーをとって、4つのグループに分けて、それがどういう商品の広告なのか、またそう思った理由はどこにあるか、などを考えてもらい、各グループで発表してもらうという授業でした。

発表のほうは、男子学生のグループは恥ずかしいのか、なかなか発表してくれずに、替わって僕が発表してしまいました。その後でも、女子のグループは自分で発表していました。

授業を終えて思ったのは、いちどにいくつかのことをしてもらうのではなく、時間をかけてでも一つ一つじっくりと進んでいくことが必要だということです。はっきりいって、まだまだ内容がどうこうという話にはできないという段階だと思いますが、時間をかけていけば、何とかなるのではないかという気がします。

まとまりのない、不明瞭な報告ですが、以上です。

From: "AIZAWA Knk"
Date: 2003.10.16 11:45:15 Japan
To: <clph-ml@freeml.com>
Subject: [clph-ml:0288] 福井高 10/7 「名前紹介」報告と今後の予定

臨床哲学研究室のみなさま

こんにちは。会沢です。

福井高「出会いのてつがく」二学期第三回「名前を覚えよう」(10月7日)の報告と、今後の予定をお知らせします。

第三回の授業では、意見交換できる場・関係作りのために、あらためて名前紹介をしてもらいました。

約20人で机を円形に並べて座り、名前覚えゲーム、ネームプレート作り、名前紹介(漢字の書き方説明と、名前の由来、呼び名、学年・組)と名簿作成と進めました。

体も動かしつつ関係作りをと思い、誕生日順での席替えも途中で試みましたが、これは動きが鈍くうまくいきませんでした。また私が名前を覚えられない失敗もありました。

しかし、誰もが一応関心を持って参加していたので、ま

あよかったと思います。

なお、授業のルール（授業中に携帯を使わない、筆記用具を持ってくる）や成績のつけ方についても、全体で確認しておきました。

中間考査を挟んで次回 10 月 21 日は、自分の好きなものマップを各自作成し、それについて互いに質問・コメントし合うことを予定しています。お互いを知りつつ、うまく質問・コメントできるようになってもらえたらと考えています。

From: "AIZAWA Knk"

Date: 2003.11.2 22:10:56 Japan

To: <clph-ml@freeml.com>

Subject: [clph-ml:0314] 福井高 10/21・28: させるのは困難

臨床哲学のみなさま

こんにちは。会沢です。

福井高「出会いのてつがく」10月21日と28日の様子を報告します。

=====

なお、その前に一つ。今週 11 月 7 日（金）の教育分科会では、榎本さんの授業案を検討します。

テーマは、広告とキャッチコピー、友達や自分のキャッチコピーを作ろうというものです。

ご参加とアドバイスをよろしくお願いいたします。

=====

藤本さんには前報に返信いただきありがとうございます。その後大変です。

第四回 10 月 21 日は、自分の好きなものマップの作成と質問・コメント交換を試みました。ねらいは、好きなものを具体的に挙げることで自分を提示してみること、また上手な質問・コメントを意識的に試み、互いに関係を作ることでした。

しかし、冒頭「前回の名前紹介に続き...」と説明を始めようとしたら「えー」と言う生徒がいて、机を円に並べようと言っても「いやー」と言う生徒がいて、作業に取り組むならばと思って座席をそのまま容認したら、作業にもあまり取り組みませんでした。

一部の生徒たちはマップ作りと質問・コメント交換を仲

間内ではそれなりにしましたが、寝たりマンガを読み続けてほとんど取り組まない生徒たちもいました。親しくない者同士の質問・コメント交換に動かすことはほぼできませんでした。

私はマップ作成と質問・コメント交換をともにやるように大分言いましたが、次第に、私がそのように言ってもだめだとわかりました。最後はあきらめて、思っていたことがあまりできないまま授業を終えました。

反省したことの第一は、生徒たちはやる気にならないときはやらないし、私もそんな生徒たちにやらせるのは嫌だし、そもそもできないことです。今回であれば、生徒たちに作業させようとするより、自分のマップを前の黒板に面白そうに書いて見せたら、もしかすると生徒たちも興味を持って見て、釣られて自分のマップに取り組んだかもしれません。授業中までは、そんなことをしなくても各自取り組むだろうと思っていたし、生徒たちには私のマップはあまり面白くないだろうと思っていたので、そこまで思い至りませんでした。生徒たちに幾らか好きにさせておきつつ、誘ったり自らやりだすのを待つ余裕が必要なのもかもしれません。

また、最初に机を円に並ばせて授業に取り組む体勢を作ることがやはり必要だったと感じました。さらに、仲良しを越えての交流に自ら動こうとはしないので（今さらと感じるからなのか）、互いへの関心を持たせるには一人一人が発言し他の人がそれを聞くような形をとるほうがよいかもしいないと思いました。

第五回 10 月 28 日は、「ケータイの使い方 (1)(いつから、用途、頻度、費用、制限、よい点、困る点など)」について話し合う予定でした。しかし、やる気のない生徒にやらせるのは前回でうんざりしたので、このテーマがいやなら「授業（学校）のいやなこと、好きなこと⇒どんな授業（学校）がいい？」という根本的なテーマでもよいことにし、生徒たちの考えを聞いてみることにしました。（昨年度福井高校での中岡先生の授業を参考に。）さらに、それもいやならば、私の恋愛話でもよいことにしました。最後のテーマは、私が提供できて生徒たちが一番興味を持つと思われたサービス企画でした。

少しでも話しやすい場をと思い、カーペット敷きでパイプ椅子とサイドテーブルのある音楽室を使いました。円形に座るのは嫌だったのでやめました。場所が変わったので何をやるのだろうかという授業に向かってくる感じがいつもよりありました。白板を動かして生徒たちの席との距離を縮められるのも利点でした。

テーマを提示して授業で何をしたいか尋ねたところ、「映

画が観たい」との声があがり、「それなら今度シネマ・カフェをしようか」と言ったら乗ってきたので、とりあえず A4 黄色の紙にマジックで観たい映画のタイトルを書いてもらって張り出しました。

その後、授業(学校)について自分の意見を同じくマジックで紙に書いてもらって張り出すか、恋愛話が聞きたければ質問を出すように求めました。質問は前回の質問・コメント交換を意識していました。すると、上手な質問をどんどん出したり、自分の思いを大きい声で話す(クラスの人たちに向けてというより、独り言あるいはおしゃべりを皆に聞こえる声ですという感じで)生徒もいて、他の生徒たちも興味を持って聞いていました。また、授業(学校)についても何人か意見を出してくれました。

ただし、紙に書くよう指示しても黙ってじっとしている生徒たちもやはりいました。

生徒たちは概ね授業に興味を示し、自由でラクで、他の人や私の話が聞けてよかったようでした。私も、私やクラスの他の人たちに出会い、自由に話し、それらを楽しむという点で「出会いのてつがく」の基本線に則っていたし、一度はこれもよかったと思います。しかし、このようなことをだだら続けることもできないので、他の内容でも自由に積極的に授業に参加してほしいと思います。そうなるように授業を準備したいと思っています。

次回 11 月 4 日は、ケータイの使い方について、ケータイのコミュニケーションを扱った短い怖いマンガを中心に、自分たちの使い方も振り返りつつ、考えてもらおうつもりです。作業の材料を提供し、ある程度自主性に任せつつ取り組んでもらおうと思いますが、さて乗ってくるでしょうか。また、12 月は生徒たちのリクエストを採用してシネマ・カフェに予定変更です。これから作品を選びますが、もしお勧めがあれば教えてください。

今後とも応援をよろしくお願いします。

From: "AIZAWA Knk"

Date: 2003.11.18 00:07:55 Japan

To: <clph-ml@freeml.com>

Subject: [clph-ml:0340] 福井高 11/4 ケータイ、よほど面白くないと

臨床哲学のみなさま

こんにちは。会沢です。

遅くなりましたが、福井高「出会いのてつがく」11 月 4

日「ケータイの使い方」の授業を報告します。

高校生と私たちがますます手離せなくなるケータイというメディアとその使い方を、自分たちの使い方から考えてみたらどうかと企画しました。

進行は、まず「依存症」という題の短いマンガを配って読んでもらいました。これは高校生が作った放送ドラマ(2001 年 NHK 杯全国高校放送コンテストテレビドラマ部門入選作)をマンガに描き直したもので、ケータイにより対面コミュニケーションが疎かになる様子をホラー調で描いています。

生徒たちがこれを読んでどんな反応をするのか知りたかったのですが、結果は、読むときは静まって真剣でしたが、読み捨て。つまらなかったみたいでした。マンガを読み慣れた人たちの評価は厳しいようです。

次に、いつから、どの用途で、どの頻度、どのくらい費用をかけて、またどんなルールを決めて、ケータイを使っているかを尋ねてみました。模造紙にグラフや表を用意して、そこに一人一人が自分のデータを描きこむと完成するようになっていました。

しかし、生徒たちは大体、自分のデータを紙にマジックで書いて出しはするものの、しゃべったり寝たりで乗ってきません。私が補うために質問したり、グラフ・表を作ったりと働かずに、空しかったです。

出てきたデータは、「費用は月一万円程度までで、自分で払っている人もいる。ルールは特になし。メールを一日二、三十回する。」などでした。

さらに、ケータイのよい点と困る点や、マンガ「依存症」が問うていることや連想する体験、ケータイを使ってよいコミュニケーションをするのに必要なことを挙げてもらいました。

その結果、ケータイで困るのは費用で、コミュニケーションの問題(例えば、メールの返信が面倒とか、自分一人の時間を確保するのが難しいこと)は出てきませんでした。

また、「電車の中で使ってはだめ。」と言った生徒に、「そうだけど、でも使うよね。」と私や周りの生徒が突っ込んだのですが、それをどうしていくのかには深まりませんでした。

「対面コミュニケーションを大切にする。」と言った生徒もいましたが、紋切り型でした。「ケータイは対面と同じくらい近いコミュニケーションでは?だから時に直接のコミュニケーションを妨げて入り込んでくるのでは?」と投げかけてみたものの、ケータイと対面のコミュニケーションがどう違い、対面コミュニケーションがどう重要なかは考えることができませんでした。

全般的に、生徒たちがもっと話に乗ってきたら深まって面白くなると思うのですが、そうはなりません。それよりもしゃべったり寝たりします。

生徒たちは、なぜわざわざ言葉にして話し合ったり考えるのか、そんなことしなくても感覚的にうまく使えたらよいのではないかと感じるのかもしれませんが。

また、それぞれ考える気ややる気になるとときには動くのかもしれませんが、その気のないときに生徒たちを集団で動かそうとするのはとても難しいことです。うんざりだという拒否に会います。

そんな生徒たちを乗せるには、よほど面白くないと。生徒たちを誘い込むだけの深さとプレゼン。それは非常に困難なことです。

次回から二回、榎本さんの授業です。授業プランは教育分科会の報告のとおりです。

榎本さんの健闘を祈ります。私もできるだけサポートしたいと思っていますが...

報告をお楽しみに。

12月のシネマ・カフェは、リクエストの多かった「黄泉がえり」か、「ピンポン」も面白いかと思案しています。映画を観るのはよいとして、映画について生徒たちが話すかどうか疑問に思っています。

「ピンポン」のほうが話せそうですが、乗ってこないかも。それなら、より受けそうな「黄泉がえり」にして、生徒たちがどこを支持するのか探してみようかとも。どちらがよいでしょうか。

From: naoki kashimoto

Date: 2003.12.1 12:54:42 Japan

To: <clph-ml@freeml.com>

Subject: [clph-ml:0359] 福井高校授業 感想

こんにちは、かしもとです。

11/18と22の2日間、福井高校で「広告」(主にグラフィック広告)をテーマに授業をしてきました。

結論から言うと、「初顔の強み」ということにつけるかもしれませんが、それなりに満足のいく授業ができました。たしかに20人ということもあり、寝る人、本を読んでいるひと、しゃべっている人、無気力な人など様々でしたが、以外と素直で、こちらから話を振ればちゃんと答えるし、授業を著しく妨害するわけでもなく、思ったほどの混乱はありませんでした。噂によれば、もっとひねくれているのかなと思っていましたが、「まあ高校生というのはこんなもんだらう」という感じでした。わ

りと生徒の方も好意的に受け取ってくれたみたいでした。

(1日目)

授業はまず、その日の朝刊から広告の部分をきり取ったものを黒板にはりだし、それから生徒に「どこに」「どんな」広告があるかをあげてってもらいました。身のまわりにある広告の多さに驚いているようでした。

次に、僕が5つピックアップした広告を紹介し、どれが一番ピンとくるかを投票してもらいました。これはかなり意図的にターゲットがはっきりしたものを選んだため、投票ではわりときれいに「若い人向け」の広告に票が集中しました。

この投票の意図は、「広告にはターゲットが存在する」ということ、またどの年代、性別にターゲットを絞るかで「広告の打ち出し方がかわる」ということを意識してもらおうということにありました。また特に多かった答えに「なんとなく」というものが多かったので、すこし困りましたが、確かにドラマを見て、雑誌を読んで、広告に注目するひとはいないと思うので、そういう「なんとなく」にどう訴えかけるかが重要なことなんだ!と逆に持ち上げてみたら生徒もすこし驚きつつ関心を示していました。

次に僕が個人的に気になった広告を紹介したのち、「携帯電話」に限って、さまざまな会社ならびにターゲットにむけた広告を紹介し、上記の意図をより具体的に感じてもらおうということを試みました。

1日目の授業を振り返ると、すこし資料が多すぎたかなと思いましたが、生徒の感想を読むと比較的知っている広告があったためか興味をひいたようでした。しかし中には「広告のことを考えても社会に出て役に立たない」という意見が何人かいたので、2日目はまずこの授業を通して伝えたかったことをさきに紹介することから始めることにしました。

(2日目)

土曜日ということもあり少し生徒はすくなくでした。

この日は阪急デザインシステムズでコピーライターをしている相川さんに来ていただき一緒に授業を行いました。まず、先に書いた「オチ」ですが、「広告(広告の考え方)はこれからの君たちにとって役に立つんだ」ということです。(役に立つことがいいか悪いかということには置いておいて、関心を引くためにあえて強調しました)というのは、広告媒体という枠ぐみはずすと、普段お

こなっていること、「相手に自分の考え(この場合特に自分のよいところ)を効果的に伝える」ということにつながるからです。だからあえて「広告は、人間関係、面接、恋愛に役に立つ」んだとあえて大げさに伝えました(笑)。

で、相川さんにバトンタッチし、作品を見てもらったあとに実際コピーを生徒たちに書いてもらう作業に入りました。

テーマ・・・クリスマスは「モスチキン」を食べよう!

前もっていくつかの「特徴」と「ターゲット」を提示し、それらから一つずつを取り出し、組み合わせコピーを書くというものでした。

最初は「わからん!」「むずかしい!」と言ってましたが、作ってみると意外とともな、おもしろいコピーができました。できた人から順に発表してもらいましたが、それにコメントを加えていくと、次々と書く子もいたりして楽しい授業になりました。

最後に感想を書いてもらいましたが、1日目には「興味ない」と書いていた子が2日目には「広告を見るのは楽しい」という感想になっていたり、「考えるの楽しい」(おそらくコピーをという意味でしょうが)と書いてくれたり、と様々な感想をよせてくれました。

(個人的感想)

- ・確かに授業を受ける態度には問題はあります。僕も何度か、ため息をつくしかないな、とも思いましたが生徒に「全く悪気はない」だけに困りました。でもほんと高校生というのはあんなもんです(自分をふりかえてみても)。
- ・授業の導入の仕方に半分以上神経を使うなと思いました。
- ・先生と生徒の役割をまずはっきりさせないといけないと思います。確かに臨床哲学として関わるときに、学校の先生と同じことをする(上下関係などを含め)には抵抗があるのかもしれませんが、まずはっきりさせた上で、「今回は枠をはずしてみよう」とか「この役割って意味があるのかな」という所から順に考えないと、いきなり垣根を低くしても生徒も戸惑うのではないかと思います。
- ・考えるのは「邪魔くさい」「うっとうしい」とは感じてはるようでしたが「嫌い」ではないなと感じました。

以上が授業の報告と感想です。

会沢さんをはじめ、準備に巻き込んだみなさん、ありがとうございました。

From: "AIZAWA Knk"

Date: 2003.12.28 14:53:04 Japan

To: <clph-ml@freeml.com>

Subject: [clph-ml:0401] 福井高シネマカフェ、2学期反省

こんにちは。会沢です。

福井高校「出会いのてつがく」2学期は、榎本さんに実施・報告していただいた広告・キャッチコピーの授業の後、シネマカフェと2学期反省を行い、終了しました。報告します。

榎本さんによる授業は、コピーライターの相川さんを選んでいただき、作品と説明、コピー作りが生徒たちの印象に残ったようです。

榎本さんの手をかけた資料や、わかりやすい説明、話し上手も感心で、私も見習いたいと思いました。どうもありがとうございました。

第9・10回、12月2・19日は、リクエストにもとづき、映画「黄泉がえり」を観て、シネマカフェを試みました。「黄泉がえり」は草薙剛、竹内結子主演の大ヒット映画で生徒たちが楽しめるだろうと思い、決めました。

その後の「カフェ」は、フリートークでは発言できない生徒たちもいると思い、まず、映画について一言とフェイスマーク、5段階評価で一枚の用紙に表現してもらいました。

次に、その用紙を白板に書いた5段階評価軸に合わせてみなに貼り出してもらい、それを見ながら、最初の一言をより具体的に表現するように、聞いていきました。

フェイスマークは取り掛かりやすく、貼り出しても楽しく、また貼り出すと評価の幅が一望にできてよかったです。そして、最初の一言をより具体的に聞いていくと、「よみがえりはいいことか悪いことか考えさせられた」との発言が出て、この問いを中心に、生徒たちの意見を聞きました。映画の主張には反して、「よみがえりは悪い」との意見が優勢で、興味深かったです。

さらに、一言で「ありきたり」、「単純」と表現した生徒たちに少し粘って説明を求めると、「日本の映画っぽい。ストーリーが完結してる。

洋画は課題を残して終わるものが多いように思う。」との発言が出ました。

先の問いとそれへの意見、諸理由も、この評価も、私の予想を超えていて、とてもすばらしいと思いました。「カフェ」ができるかと危惧していましたが、このように内容はとても面白かったです。

しかし、他の生徒が発言するとき、それを聞こうとせずしゃべっている生徒たちが多かったのです。

騒々しくて、発言する生徒の側まで行っても発言が聞き取れないほどでした。

全体やグループに「聞いて」と注意しても効果がありません。そういう指導力の無さを生徒たちに見透かされていました。授業の気楽な雰囲気の中、生徒たちが次第に自分の感じることを表現するようになったのはよかったです。しゃべってもよいわけではなく、今何をする(した)のか、なぜ・何のためにする(した)のかをその都度もっといいに伝えていかなければならないと思いました。

授業の最後に、2学期の授業をまとめたプリントを配り、感想を書いてもらいました。

広告の授業で複数の人が教えに来て、学べたことや、自由に話せること、生徒たちの要望を取り入れたことを評価する声もありましたが、何がしたいのか分からなかった、「もっと出会いたい」とか、もっと生徒たちを静かにさせたり、ひきつけたりしてほしいとの感想もありました。おしゃべりに興じる生徒たちも、それと同時に、学びたい気持ちを持っていると感じます。

生徒たちは、知識を習う授業には慣れていますが、シネマカフェやケータイについて考えた授業のような、自ら問い、答えを探求する授業は、経験も少なく、何をどうするのか、そしてどう「出会い」と関係するのか、特に分かりにくかったようです。

やりながらやり方を学ぶのだとは思いますが、何をするのか、そして何のためにするのかを、もっとわかりやすく伝えねばならず、それをいっそう明確に持ち、強い気持ちで、伝える技術もいろいろ試していかなければと思います。

生徒たちに伝わる授業にするためには、もっと苦勞して、時間もかけなければならないと思います。

自分がやってみて、1学期の三浦さんのご苦勞がわかるように感じました！

とても大変ですが、それだけ生徒たちから教えられます。もう少しやってみたい気持ちも。

2学期の授業の一部を担当していただいた紀平さんや檜

本さん、相川さんには、授業から私が学ぶことも多く、本当にありがとうございました。

また教育班やその他のみなさまにもご協力とご支援をいただき、感謝します。

最後に、3学期担当の岸田さんたち、がんばってくださいね。

それぞれにやってみることで、また新しい気付きがあるのではと、楽しみにしております。

二学期の授業責任者



三学期の授業責任者

〈三学期〉

From: 桑原 英之
Date: 2004.1.16 14:42:24 Japan
To: clph-ml@freeml.com
Subject: [clph-ml:0423] 福井高校 3 学期 : 第 1 回授業報告

● 福井高校 3 学期 : 第 1 回授業報告 ●

○担当: 桑原、付き添い: 三浦

○内容

- ・1・2 学期にやったことのふりかえり +3 学期のスケジュール確認 (プリント有)、
- ・「占い」について 2 人一組で話し合う (資料と作業用プリント有)

○感想的報告

最初から最後までざわついたままだった。唯一静まりかえったのは、中央のグループの誰かが、ドアの側の別のグループの誰かに、ドアを閉めてほしいと声をかけたときだけだった。その瞬間だけいわく言い難い緊張感があって、よく覚えている。

話に聞いていたとおり、「しゃべる」「寝る」「携帯いじる」という彼・彼女らの鉄のカーテンに話を折られては遮られた。

「組む」「つるむ」「しかとする」という彼・彼女らの三種の仁義 (ジンギ) の通し方に、教室内での徒党のニッチのありようだけは、自分の頃と相も変わらぬままなのだ、半ば滅入った。(当時も今も、この種の特有の生熊系だけは受け入れられない)。

腹が立つことはなかった。くらいよりは明るい方がいいと思う。

彼・彼女らを理解したとは思わないが、身に覚えるところだけは想像できた。その時分、しゃべった事が、確かにあった。眠った事は、おおいにあった。携帯は夜明け前の頃だったけど、コロンボ (刑事) シリーズを日本史の授業で読破した。教壇に初めて立ち、内心苦笑いを禁じえなかったとすれば、それはつまり、彼・彼女らに何かを思い知らされたというよりも、われが、身に、しみたのである。

帰り、三浦さんにそれらを話すと、昔の自分に出会った事が、私にとってのこの授業での出会いだっただと教えられた。なるほど、当時、高校の授業に、手段以上の何かをのぞんだことなど、ただの一度もなかったし、先生の「意図」は、汲むべきものであっても、目指すべきものではなかった。

各グループに作業内容を説明して回っているときに、携帯電話で写真を撮らせてくれと言われて、思わず頷いてしまった (というより、その時には既に 2 枚ぐらい撮っていたらしい)。登録するとか言っていたが、意味がわからない。どこでどう使われるのかという事に、一抹の不安を感じているが、或は仮に、彼女の身に何か起こった時には、真っ先に疑われる容姿に違いないと思い、そして、こういうチープな発想をコロンボから学んだのではないかと思うと、無性に腹が立った。

でも恐らく、今ではなく、当時の自分の、あの時分に、本気で腹を立てておくべきだったのだと思い、ちょっと後悔している。

なにせよ、再来週にもう一度、ただしもう 2 年生だけらしいが、授業をやる。彼・彼女らにとっては、御免こうむると言いたいところだろうが、私は正直、少しうれしい。

次回の高嶋さん + 山本さん、2 月の岸田さん、初回はこんな感じです。

リレーに喩えるなら、ずっこけるどころか、逆走しながら、前からバトンを渡すような感じがしますが、よろしく。配ったレジュメ等は研究室にあります。

1 学期 2 学期を担当された三浦さん、會澤さん。

この授業は、主観的には、意外といい線をいていたのかもしれない、と、思った。

長々と恐縮ですが、以上です。

編者注: 山本さんの授業にかんしては、『臨床哲学のメチエ vol.13』40 頁において、報告がなされています。

洛星高校での授業について

紀平 知樹

臨床哲学研究室では、これまで大阪府立福井高校で2年間、哲学の授業に取り組んできました（1年目の授業の報告は『臨床哲学のメチエ』vol.11を参照）。様々な経緯から、この福井高校での授業はいったん終了にしようとする研究室での話し合いで決まったところで、偶然の成り行きから、京都の私立高校の洛星高校で授業をしてみないか、という話をいただきました。

いったん福井高校での授業をやめることにしたので、そこでまた違う高校での授業を引き受けることに関して話し合いがもたれましたが、最終的には、有志4人がコーディネーターになることで、洛星高校での授業を引き受けることになりました。

洛星高校での授業を引き受けるにあたり、福井高校での授業を批判的に検討してみました。そこでいちばん問題になったのは、授業を通底するテーマに欠けていたということではないかということです。福井高校では、「出会いの哲学」ということで、様々な職業の人たちをお願いして、その人の仕事に関連する事柄について話してもらおうということを1年目はしていました。2年目も、基本線はそのままで授業を行っていましたが、そのような授業形態では、毎回テーマが変わってしまい、授業を受けている側の立場に立ったときに、「いったいこの授業は何の授業なのか？」という疑問を抱かせてしまうのではないかという危惧を抱きました。

このような反省から、洛星高校の授業では、年間を通じてのテーマを設定するという作業から授業の組み立てを考えました。コーディネーターで話し合った結果、「生命と哲学」というテーマで年間を通じて授業をするということが決まりました。つまり「生命」という問題に対して、「哲学」はどのように切り込んでいけるのか、また生命に関して、哲学的に議論するとはどのようなことか、ということ伝えるための時間にしたいということになりました。そして選ばれたテーマが、生命の始まりや終わりに関わる問題、身体をめぐる問題であり、リスクマネジメントに関する問題などです。

1年目の授業を終わってみて、十分に各回の内容が連関あるものとなっているかどうかは心許ないところもありますが、この授業をとってしてくれた生徒の皆さんは、それぞれの意見をよく聞き、理解し、また発言してくれており、当初の目的を、幾分かは達成できたのではないかと思います。

また今回このように洛星高校で授業をさせていただくにあたっては、私たちの研究室の卒業生でもあり、現在は洛星高校で非常勤講師として勤務している栗栖大司さんにひとかたならない協力をしていただきました。また同校の諸先生方にも大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

(きひらともき)

第1回 (4/17)

「哲学入門・内容と講師の紹介」

紀平知樹 (大阪大学大学院文学研究科) 他

全回を通して受講者に入れ替わりがないということで、初回はこの授業の目的や内容を説明することにした。参加者は臨床哲学研究室所属の教員の紀平と屋良、それから卒業生の三浦と森、第4回の授業担当者の山本の5名。栗栖さんにも参加していただいた。

まず紀平が配布した資料に基づいて、全6回の授業内容と講師のプロフィールを紹介し、その後に参加者ひとりひとりが自己紹介と研究テーマを話した。また、今後の授業の参考のために生徒からアンケートをとった。

第2回 (4/19)

「ヒトはいつ人になるか—ES細胞とクローン技術の倫理学」

寺田俊郎 (明治学院大学法学部)

担当者は洛星高校で教員をしていた寺田さん。生命倫理の問題について生徒間でディスカッションをする試みをした。まずディスカッションのために、生徒どうしが対面するよう机を動かし、それぞれの名前を書いた札を作って机の上に立ててもらった。

授業内容は2回連続の授業の1回目として、最初にES細胞やクローン技術について、生徒がどの程度知識を持っているかを聞きながら、新聞報道や資料を使って説明を行った。何人かの生徒はすでに知識を持っていたようである。そして、ディスカッションのテーマにするための問題点を生徒どうしで自由に相談し合い、その後に、各自、各グループで問題点の発表を行った。生徒から出た論点をいくつかあげておく。

- ①人間と他の動物の間に線引きをすることはできるか？
- ②人間がビジネスの道具になる—臓器作りなど
- ③受精卵と胎児・新生児の扱いの差別—胚は壊してよいか？
- ④クローン胚と受精卵の区別は成り立つか？

説明に時間がかかり出された論点について、初回は深く掘り下げることができなかったが、論点はかなりの確なものであったように思う。

第3回 (5/1)

「ヒトはいつ人になるか—ES細胞とクローン技術の倫理学」

寺田俊郎 (明治学院大学法学部)

前回の授業で生徒から出された論点の絞込みをして、生徒と哲学カフェ風にディスカッションを行った。議論したのは次の2点である。

- ① (クローン技術で) 同じ人間ができることで生じる問題—アイデンティティー、自分がなくなる？
- ②受精卵と胎児・新生児の扱いの差別—胚は壊してよいか？

どちらの問題についても驚くほど活発なやりとりが行われた。①に関しては、アイデンティティーについて、鷲田先生の文章を読んだことがあるらしく、この授業の前から深く考えていた生徒もいた。クローンがアイデンティティーを揺るがすという意見への反対意見としては「環境が違えば人格は異なる」「出自への疑問はクローンだけが感じるものではない」といったものが出された。ここから「アイデンティティーとは何か」という哲学的な疑問へとつながっていった。②に関しては、「医学的なメリット」と「ヒトから人への連続的な成長」という点で対立があった。

授業終了後も生徒が質問に来て、自分の意見の言い足りなかった点を寺田さんに熱心に話しており、生徒にとって強い関心を引いた授業だったようである。

第4回 (5/8)

「つっこむことから始めよう」

山本麻紀子 (京都市立芸術大学大学院)、高嶋麻衣子 (大阪大学大学院文学研究科)

第4回の授業は少し違った角度から哲学的なものに触れてもらおうと思い、アーティストの方をお招きしました。まずは講師の山本さんの作品を鑑賞する事から始めて、日常生活の中から表現のきっかけを掴むということ、山本流の「つっこみ」作りということによって体験してもらいました。ただ初めは少し戸惑いも感じられました。この戸惑いには「美術」という枠から外れた山本さんの作品に対してのものや、これのどこが哲学なの？というものも含まれていたように思いますが、純粋に「面白い」山本さんの作品に触れるうち楽しむ空気が変わっていきました。

「つっこみ」作りの時間では同時に山本さんの作品を自由に見たり触ったりしてもらったのですが、「つっこみ」そっちのけで作品鑑賞に熱中する生徒もいたり、山本さんが座席の方まで行くと、疑問に思っていることなど小さなことでも真剣に聞いて来てくれたり、クラス中を爆笑させる「つっこみ」を作る生徒もいたり、講師の方もその反応の良さに感激しつつ、生徒の皆さんも普段とは違う授業を概ね楽しんでくれていたようでした。

第5回 (5/22)

「対話でトラブルを解決する—メディエーションを学び、使う」

稲葉一人 (科学技術文明研究所)

日常生活におけるさまざまな対人関係のトラブルをいかに解決するか。訴訟社会の米国において、訴訟によらずに当事者間の自発的な対話によって解決するためにサポートする新しい調停技法が開発された。それが「メディエーション」である。今回の授業では、元判事でもある稲葉が2人のスタッフとともに、その方法を模擬調停のビデオで紹介しつつ、生徒たちとの対話を通して、生徒たちの考えを深めた。

授業は、ビデオで調停の失敗例と成功例を視て、失敗の原因と成功の原因を話し合い、洞察を深める形で進めた。そこで、どのように問題を解決するか、紛争当事者同士がみずから対話によって発見できるためには、何が必要なのかを、相手の心を押し量りつつ、考えることが重視された。

本来の講義計画では生徒たちに実際に模擬調停をしてもらう予定であったが、時間がなく省略した。その点で生徒の不満があった。しかし、正解を一方向的に相手に押し付けるのではなく、どのようにしたら問題解決が可能かについて、さまざまなアイデアが出され、活発な議論があった。

第6回 (7/3)

「ヒトはいつ人になるか2」

森 芳周 (大谷大学文学部)

4/19と5/1の寺田さんの授業を受けて、より具体的に、ヒトが生存権を持つ人間になるのはどの時点かという線引きの方法について議論をした。目的は、胚や受精卵を利用する最先端の医学研究が、人間の成長の或る時点で線引きをするという倫理的、宗教的な問題と切り離せずに存在していることを、議論を通じて実際に知ってもらうことだった。用意した問いは以下の3点である。

- ①人間はどの時点から私たちと同じ尊厳(生存権)を持つのか？
- ②人間の尊厳・生存権の根拠はどこにあるのか？
- ③研究目的で胚を作成し、利用することは許されるか？

しかし生徒からの意見にうまく対処できず、①と②について議論をただけで終わってしまった。生徒は「人間の尊厳」という言葉に対して疑問を抱いたようで、「なぜ人間に尊厳があって、動物には認めないのか？」という問いが出され、そこから、議論が思ってもみなかった方向に移ってしまい、最後まで元に戻すことができなかった。議論が続かなくなることを心配していたが、むしろ途切れることがなく、それによって話が逸れてしまい、生徒にも私にも不完全燃焼といった感じが強く残った。

第7回 (10/30)

「リスク論」

屋良朝彦（大阪大学大学院21世紀COE特別研究員）

生命倫理のみならず、科学技術倫理一般に通底する問題として、「リスク論」を取り上げ、以下の三つの点を議論しようとした。

- 1 何がリスクなのか？
- 2 除去すべきリスクと許容すべきリスク
- 3 市民とリスク

リスクとは生命や健康への被害だけを指すのではなく、精神的、文化的なものをも含む多彩なものであり、科学者・専門家が一方的にリスクを指定できるものではない。したがって、何をリスクとすべきかということは科学者のみならず市民を含めた広範な議論が必要である。またリスクの完全な排除も多くの場合は困難であり、どのリスクが受け入れ可能かといったことも一方的に決定することはできない。

本来ならばディスカッションに多くの時間を割くべきところであったが、説明に時間を費やしすぎて、生徒に発言してもらった時間を十分にとることができなかった。

第8回 (11/6)

「出生に関する生命倫理の問題」

西村高宏（神戸学院大学非常勤講師）

今回の講義の目標は、「問題とする事象のもつ本来的な問題点の所在が浮き彫りになるような問を立ててみる」ということで、出生をめぐる医療現場（着床前診断、出生前診断、重度障害新生児の治療停止）において問題になっている胚・胎児・新生児などの〈身分〉にかんしての現状を報告し、それらをもとにじっさいに生徒のみなさんに〈問い〉をたててもらいました。

与えられた問題にすぐさま答えを出すのではなく、むしろ与えられた問題に含まれている本当の問題とは何か、またそれを明らかにするような問とはどのようなものかを考えてもらいたいと思いました。

第9回 (11/20)

「痛みのコミュニケーション」

中岡成文（大阪大学大学院文学研究科教授）

授業は、最初30分ほど問題についての説明を行い、その後生徒たちに自分が問題と思うことを〈問い〉の形であげてもらった。この出生に関わる問題は前期にも二度ほど行っており、その時にも出席していた生徒もおり、活発に意見が提出された。

今年度の授業の大きなテーマは「生命の哲学」であり、この回に関していえば、生命の問題から知識・身体の問題への転回点にあたる回であった。そこで具体性のあるテーマを素材として選び、抽象的な知識やそれにもとづく議論ではなく、むしろ「身体的実感」にもとづく議論を行うことを目指した。

実際には以下の二つの課題を設定した。

- 1 どのように痛みを感じるのか、またどのように痛みを表現（表出）するのか。
- 2 どのように痛みに対応するのか。

この二つのことを議論するために、さらに（1）自転車で転倒し、痛みを訴える患者の事例と、（2）糖尿病で入院中の乱暴な患者の事例を紹介した。この事例を紹介した後、議論を行った。

これまでの回と同様に、生徒たちからは活発に意見が出された。しかしながら「痛み」に関して十分な定義を行わなかった（身体的な痛みなのか、それとも精神的なものなのか）ために、生徒たちにとまどいを与えたようにも思われる。

第10回(11/27)

「地球は本当に丸いか—知識を哲学する」

寺田俊郎(明治学院大学法学部助教授)

いったい知識とは何か、それはどこからやってくるものか、私達が実際には見たこともないようなことについてどうしてそれが正しいといえるのか、といったことについて、様々な判断を通して考えてもらった。

最初に「地球は球形である」「人間は神によって土からつくられた」、「男はめそめそしてはならない」などといった9個の判断(命題)を例示して、それについて真か偽かを議論してもらった。その後、グループディスカッションの時間をとり、「真理の基準は何か」について各グループごとに話し合ってもらった。

今回の授業は、直前に開始時間が10分ほど繰り上がっていたが、学生にはそのことがあまり伝わっておらず、授業開始時間になっても休憩中と勘違いしている学生がいた。これまでの生命に関わる問題や、痛みの問題とは異なり、テーマは抽象度の高いものであったにもかかわらず、学生からは活発に意見が出された。

第11回(12/4)

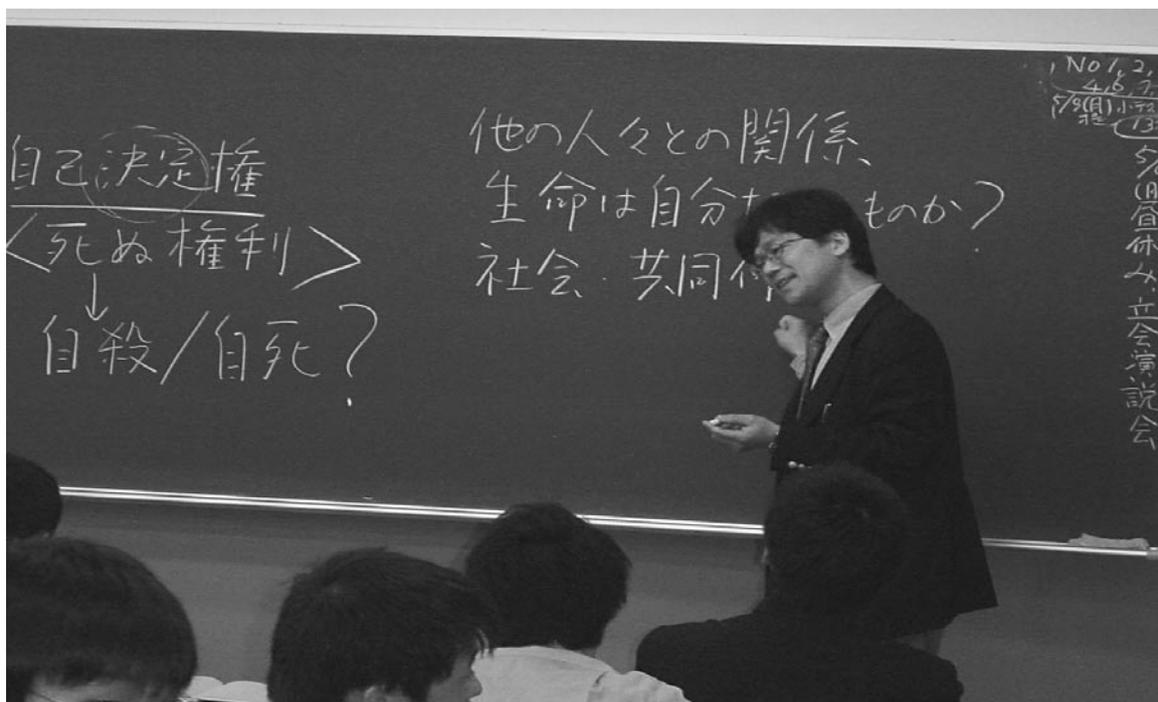
「他人や自分のからだってどうやって感じれるの? 無自覚の知」

玉地雅浩(藍野大学医療保健学部講師)

わたしたちが日頃何気なく行為や動作を行っているとき、わたしたちは体のことをどこまで自覚しているのか、また、自覚しなくてもできるのでしょうか。あるいは自覚している場合、どこまで感じる事ができたり、動かすことができるのでしょうか。これらの問題を考えながら他人や自分の体について、また人と一緒に動くには何が必要かを具体的な手がかりや課題や運動を通して考えてみた。

この授業は、実際に体を動かすということもあり、ふだんの教室ではない場所で行われました。

様々な例を提示しつつ、また生徒の皆さんにも実際に体験してもらうことによって、自分自身の体や、知覚について考えてもらおうと思ったが、受講生が40名ほどいたこと、屋外に出て声が届きにくかったこと、学校の球技大会の影響で、考えていた道具が使えなかったことなどが重なってしまい、思ったように授業を運ぶことができなかった。



第2回、第3回を担当した、寺田俊郎さん

編集後記

企画内容は文字どおり二転三転しました。

当初は2003年度の「出会いのてつがく」の授業内容の報告となるはずでしたが、各学期の授業責任者がそれぞれ慣れない非常勤の準備に追われたり、米国へ留学したり、大学外での仕事に忙殺されたりして、挫折。この時点で私の頭の中ではすでに「ML上で流した授業報告をそのまま使用しよう」という悪知恵が働きだしていました。

とはいえ、「MLの報告だけではなあ」という思いもあり、他のトピックとうまく抱き合わせることができないかと思案し、去年の初夏の頃からML上で沸き起こった臨床哲学にかんする論争（「臨床哲学は共同作業たりえているか」「哲学カフェにおいて進行役の役割とはいかなるものか」などが主な話題）をセットにしようと思いい立ちました（藤本さんの文章の冒頭の言葉はこのML上での議論のことが念頭に置かれています）。しかし、しょせん内輪の議論にすぎないものを「外」へ発信するのはいかなるものかという意見もあって、これも挫折。

そうこうしているうちに2004年度の洛星高校での授業までもが終了してしまい、年度さえもが改まってしまいました（したがって、2004年度の『メチエ』は一冊のみ発行）。「ともかく、早急に作れ！」という紀平さんの檄のもと、なんとかこぎ着けたのが今回の『メチエ』です。大幅に発行が遅れてしまったことを深くお詫びいたします。

なお編集作業のさいには紀平さんの手をたびたび煩わせ、最後の詰めの段階では高橋さんに手伝っていただきました。お二人に感謝いたします。

（三浦）

臨床哲学のメチエ Vol.14 2005 春夏号

総編集：紀平知樹

編集：三浦隆宏

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

clph@let.osaka-u.ac.jp

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/>